

大村藩三十七士の碑

3月 28



日本中が勤王か佐幕かと混迷していた幕末のころ、大村藩では、渡辺清・昇兄弟、針尾九左衛門、松林飯山、長岡三郎、楠本正隆らを中心として、勤王の動きがありました。彼らは、同志で血盟を結び、密かに会合を続け、諸藩の志士と交わり、時の藩主大村純忠へ幾多の建言を行うなどその活躍はめざましいものでした。この同志が後に三十七士と呼ばれ幕末の大村藩を率いた集団です。

慶応三年（一八六七）中心人物の一人であった松林飯山が暗殺された事件を契機に佐幕派の多くが処罰され、藩論が勤王に統一され、倒幕に向かいました。

明治二年、新政府の論功行賞により大村藩に与えられた賞典は、薩摩、長州、土佐に次ぐ三万石であり、倒幕における大村藩の活躍が高く評価されたことがうかがえます。このことは、藩主の英断とともに、その原動力となり藩を率いていた三十七士の活躍によるものが大きかったと思われまふ。

これらの碑は、三十七士の功績を讃えるため、倒幕の際に倒れた人々の祭つある当地に、三十七人の碑を死没の順に並べて建てられました。明治三十六年に建設が始まり、幕末に倒れた松林飯山を筆頭に、大正六年に三十七基がそろい、現在に至っています。

平成八年三月

大村市教育委員会



出土した朝長伊勢守の屋敷の一部とみられる柱の跡＝大村市水田町で

大村純忠の重臣 伊勢守屋敷跡か

2006 10/28

大村で柱跡など出土

大村氏の城下町は三城（同市三城町）の西側にあり、伊勢守の屋敷はその南端にあつたとされる。伊勢守は、純忠に仕えた筆頭の老臣であつた。

発掘は宅地造成に伴う確認調査で、市教委が今月初めから取り組んでいる。今後、絵図などの記録と詳細に照合する作業を進めるといふ。

戦国時代のキリシタン大名、大村純忠の重臣であつた朝長伊勢守純利の屋敷跡とみられる遺跡が大村市で見つかり、市教委が27日、公開した写真。この時代の城下の調査は全国各地で進んでいるが、県内では同市が初めて。

今回、発掘したのは同市水田町の1300平方

120本の柱跡、3棟の建物跡が見つかった。当時としては貴重だった中国製の青磁や染め付けのかげらなども出土した。

城下町を描いた絵図などと照合した結果、伊勢守の屋敷跡とみられることが分かったといふ。